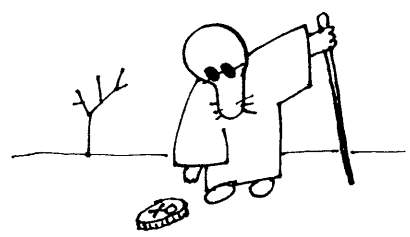
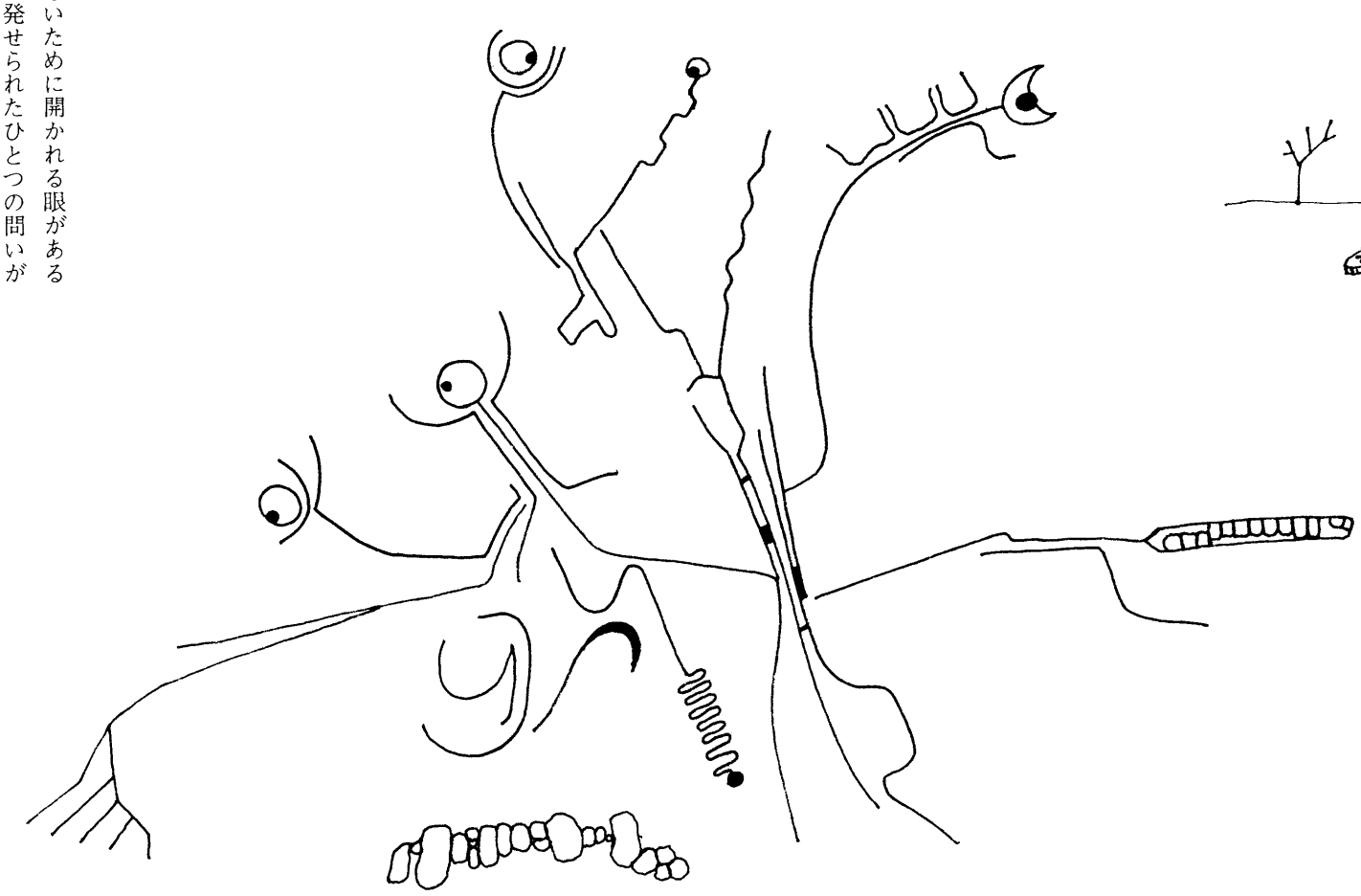
第五列：唇の周辺は人類の共有物である叢書②

オムニバス「詩集「以前」



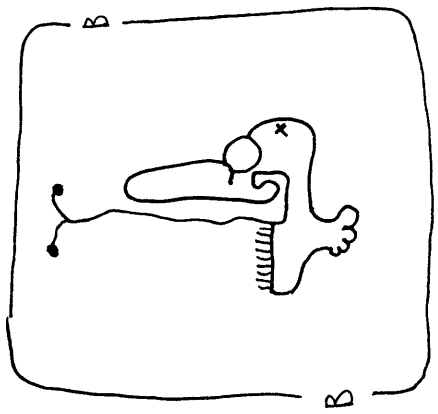


以前

何も見ないために開かれる眼がある
どこかで発せられたひとつの問いが
いまだに虚空を反響し続けるように
遠い雲がありさらに遠く青空がある

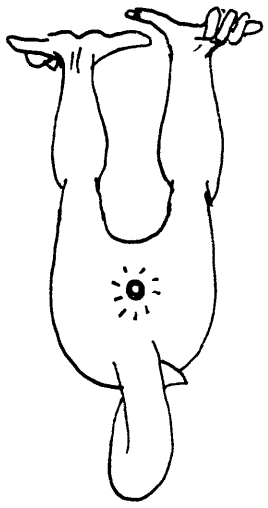
＊参加
村中文人
東野　正
藤原美幸
中塚敬子
高橋昭八郎
藤本和男
金野吉晃

代表連絡先＝〒020 盛岡市新田町10―31コーポアカシア８　村中文人 1979 0525 定価100円



騒音四月の復讐

甘くて青臭い四月芋虫の街
自転車に乗って見習僧たちが過ぎる
ゆうぐれて埃の中キヲめくいイウエイかすみ
空を滑る飛行機見えず
壊れたラジオ豆腐屋の風
催涙四月のやさしい放水に
ア千隊ツ ホールに吸いこまれゆく
苦い汚水火照ったアスファルトをなぐさめた
ひとつこひとり広場にいない
夕陽ひとつただ卵の黄味のように落ちたタ陽に
芋虫とろとろ溶けてゆくとか



体操

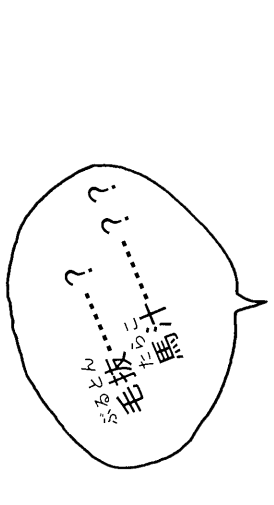
昼の
まったりとした
にほんやうな
日光のなかで
馬鹿供が
顔の無い
五列になって
体操している
のではないだろうか

①←→①。②！

こんなことなんでもないさ
極点に　単独で
こんなことに意味はないぜ
極道で　独房に
こころに言葉を被せれば
心理学の症例となり
また愚劣な学説を制度化すること
となる
〈自分にとっては〉という
《とって》だけのカップでコー
ヒーが飲めるものか
飲んでいるつもりになれるだけ
〈とって〉の感触は自分だけには優し
いのだろうね
見えないカップの中で
狂気は自己完結し
波立つがこぼれ出しはしない
ここまで意味をすくい続けてきた
自己完成を飲み下だしたくなったら別の容器に
〈自分〉をたっぷり盛りつけたものを

第一連には強いるような意味はない
第二連にもなんの前提を持たない
惰性で言葉を吐き出してゆけば
言語表出法の底の埃まで見せることになり
また奇妙な解釈を浴びせられることになる
〈自分が自分を救う〉という命題に純飛躍ができない
着地の格好を気にする悪い癖が出てしまうから
〈自分は自分を救えない〉という具合に複合
　競技に転向したとしても
またひとつの《自分》を登録することになり
すぐジャンプ台から押し出すことになる
ここまで言葉で滑ってきた
自己放物線を描くなら別の斜面に
それなりの観客に見せつけてね

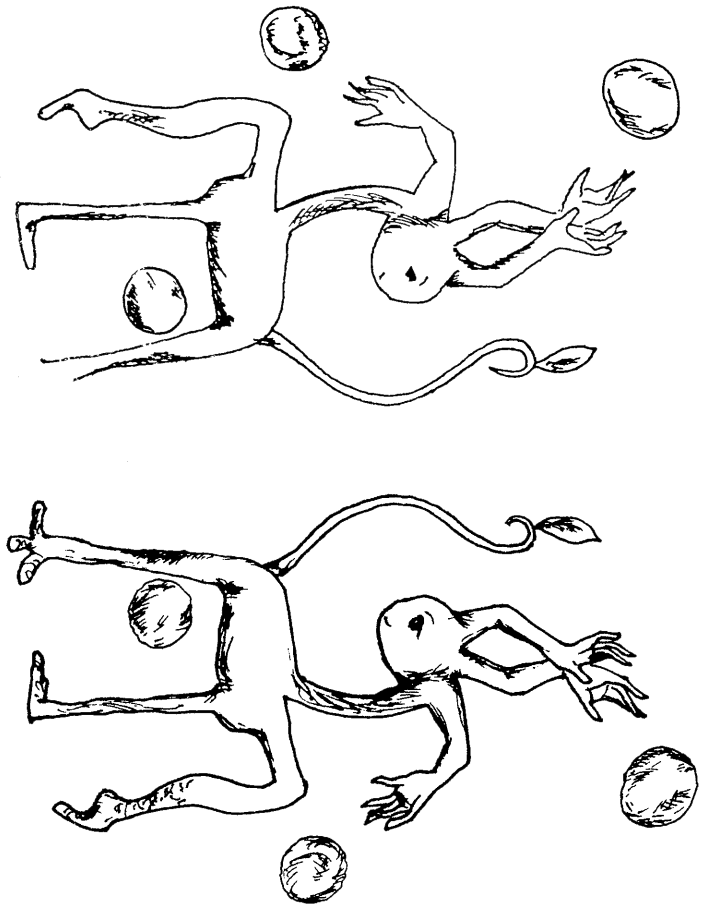
さて第三連
ここから始めることにしようか
僕が僕であることに大した意味はなく
一人分引き受けてしまったことは誤りであったと
反省を立体的に交響させる趣味の時間に
明日の幻想狂気予想図を取り出してみる
　狂気圧の谷は入り交りからみ合い
　生活圏は最狂の状態で荒れそうである
　地上的なるものを吹き荒らす幻想風
　記憶に全層なだれが生じ
　回想に封鎖され孤立する地域では
　歴史の共有感覚は埋もれたままである
　人情の最低気温が体温以下となるとき
　冷えすぎた言葉が割れ始める
それでは冷え込む明日に立ちすくまぬよう
心の不凍栓を閉め
せいぜい人間の形をしてみたり放してみたり
動き廻って暖を取る
格子の外の一行は
どこかで耐えて
第四連を待つべし
しかし
第四連は待て！



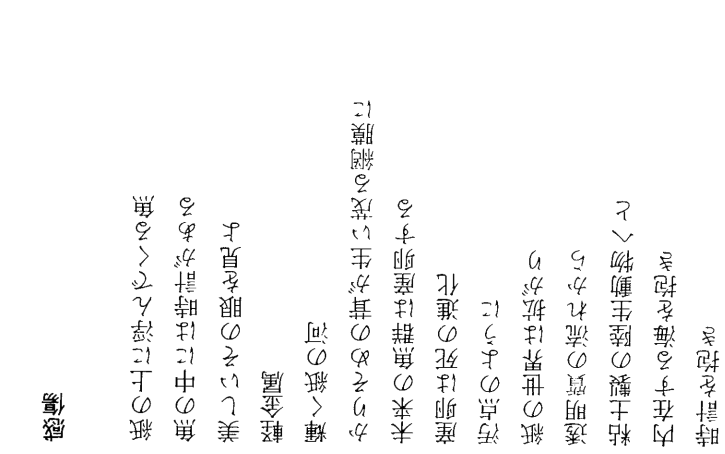
THE KEY TO DREAMS

（to René Magritte）

〝関係〟を打ち砕くハンマーを
彼は砂漠で発見した
アカシアの樹になる卵の道を辿り
寂しい月面に着くとそこには
ただ一個のハイヒールが転がっている
それでも
ロウソクと天井の間には
ススがとりもつ関係があるではないか
と僕は詩人を問い詰めたが
彼は笑って帽子の中に隠れてしまった
それは彼の好みの雪のように黒い帽子だ
僕は独り〝関係〟の海にとり残され
コップの中に轟く雷鳴を聞いた

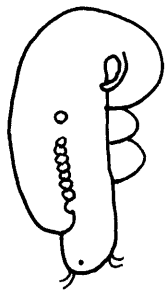


感傷
紙の上に浮んでくる魚
魚の中には時計がある
美しいその眼を見よ
輝く紙の河
軽金属
かりそめの茸が生い茂る網膜に
未来の魚群は産卵する
産卵は死の進化
紙の世界は拡がり
汚点のように
透明質の流れから
粘土製の陸生動物へと
内在する海を抱き
時計を抱き
時の海から空間へと
紙の魚たちは侵入する
太陽の巡る温暖地から
星辰の凍てつく沙漠まで
未だ到らぬ再生の場を求め
なおらかな福妻が伸びる沼地の夏
散乱する記号を尻目に
四肢と触角を養わせ
わびしい風の世代を巡り
貽盤の海で円環を閉じる
不完全進化
滴る静かな潮を固め
やがて朽ちる化石の刻限まで
待たい果汁を
細い喉をうるおすために虚しく
一束の紙片はあまりに虚しく
季節の巡りとともに
融けてゆく素焼きの人々
かつての肺魚
鎖らなる記憶の群島伝いに
点々と散らばる時計の部品を拾い
拾い切れずにのたうつ大陽
ついには裂かれた紙片の上で
魚の形に鳥の影を重ね
視線の背後に迫い落とす
見れば廃墟に似た都市の底にいて
至るだ鏡に映る姿は
空間に汚れた血脈の果てだ
未だ産卵の時は到らず
血は背後から冷えてゆく
徒らに費される紙の上の漂流は
視野を隅状に濁らせる
目指すべき陸地はすでに失なわれ
原点は始めから無かった
あとは無限に交錯する矢印の迷路で
とどまることと
とどまることと
虚空に懸かる細い細い月も
塩に埋もれた淋しい死を
選ぶのさ噴くことなく
望みもせずにそして
忘れることとさめの
昏く輝く紙の世紀を



形

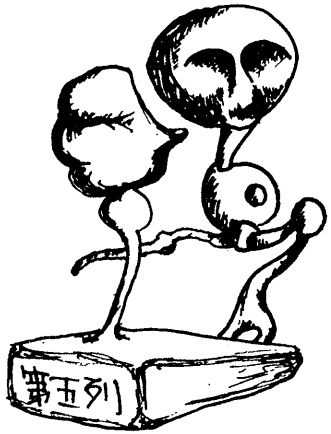
エレクトロニクスのセミが鳴いているきこえない声としてそれはとある何か黒い金属性のひろがりにきらめく／瞬間の巨大なツノの形を刻んで行く砕かれたサファイヤの森にしたたるとおいこだまの影を映してそしてついに



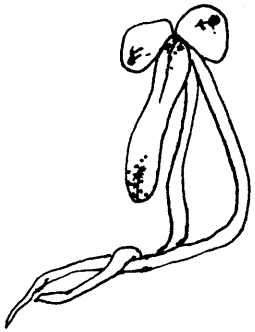
名づけられることのない閃緑岩の太陽を燐のように明滅させながらアラバスタの樹木のしげみからオリーブの葉が一枚燃えながらの〈道〉と〈夜〉のあいだに落ちて行くあ果てもない拝火教徒の固い豹の祈り透明の細長い泥の流れよタカはあおざめてかたむく畸形の水さしを鋭くねらうあえぐ瀕死のワニやロバとともにきしる盲目の蠟の車輪よケシの実のわずかにこぼれている影のない白い都市のイメーヂそれは不意に誰の声でもない焔の羽根のハガネにうたれて走る縄のように不可解な一匹の駝鳥として真昼見えないオシリスの水平線に泡立つ仮設的な刑罰の重みで音もなく鏡のように剝がれながら宝石の毛皮をかざりいけにえの行列をとぎれた沈黙の刻画へ浮きあがらせて空はただ黒い虹の濃密な影に染められて行く

月

安っぽい満月のうしろで
笑っていた楽屋の男たちも
最終の幕が降りる頃には
みんな平たくなって死んでいる



形



フクロウがカプロウと鳴く蛇よりもひそかな星の黒い葉らをしげらせてマホガニイの胎児をかかえた空が岩と〈見知らぬ神〉のわらいをかきまぜているひび割れた沈黙の杯に充ちてくる蜜と泥の透明なしたたりからっぽの秤のかたむく形を怖れKでもヨーゼフでもないひとりの奴隷がやみくもに太鼓をたたく四十三億二千万年の細ながい空間の膣を灼きつくす焔として叫びのかえらない洞窟の乾いた謎の雨に鋭くうたれていま／という瞬間の燃えさかる火刑台よかすかにひかる三葉虫の化石は崩れ不意にあらわなひとすじの刻画毛皮のようにくもる太陽の最初の影を象牙細工の棺にしずめて河はふかい傷口の森の中から流れている儀式的にわたって行く野牛の群れが消えてしまうと死者の大理石の胸を虹のように染めて眼のないワニたちがひしめきながら愛し合う

老齢

相続問題についての申し合わせ
心配の重荷にうちひしがれている
もじゃもじゃ頭の
無駄なことをする
名義だけの
ストレンアトマイン

五二

気位の高い座ぶとん
エピクロスに没頭するストーブ
俺の居間は　つかれる

時間

現在
過去
未来
そういうものはなかった

一〇

比率のいとみなす
三本の指でぶらさがる

寓話的日常の輪舞曲（ロンド）

おととい遇ったばかりのヨシちゃんが
（あすびにきてね）といったので
たそがれどき
かつらをかぶってあすびにゆくと
ふとったオトコが部屋に居て
オトコはあたしの耳元でうたをうたい
夜更けて
おめんをかぶって帰ってきたヨシちゃんは
あたしの三半規管にごごったオトコの声を
みつけると
もういちどどこかへ帰ってゆき
その後姿に　あたしは
（あすびにきてね）とつぶやいた